

遙かな国遠い国

遙かな国 遠い国

北 杜 夫

新潮社 版

検印廃止

遙かな国 遠い国

一九六一年四月十一日 印刷
一九六一年四月十五日 発行

定価 二八〇円

著者 北 杜 夫

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮 社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京 〇四七一一(九)
六二〇二(五)
振替 東京 八〇八番

印刷 塚田印刷株式会社

製本 神田加藤製本所

(落丁のものは本社又はお買求めの
書店でとりかえいたします)

三人の小市民

5

埃と燈明

67

為助叔父

105

友情

157

遙かな国 遠い国

177

装帧
赤松俊子

遙かな国 遠い国

北杜夫 創作集

三人の小市民

魔王

ほんの一瞥では、その男は、背は低いながらでっぷりと太って見えた。しかしもう少し念を入れて観察すれば、その外観は見せかけにすぎず、色のわるい皮膚の下には筋肉や脂肪の代りに単なる漿液がつまっているだけなのだ、ということが理解できた。おどおどしたほそい目は開いているよりつぶったほうが似合いそうだし、ちんちくりんの猪首も頭をしっかりと支えるより前にかめるだけの役をするとは思えない。つまり、頭の頂きから足の裏まで、相手に尊敬の念をおこさせる要素がただのひとつも見当らないのだ。さげているカバンにしても皮が古びているというより、単に一塊のボロ切れとしか見受けられぬ。靴は前世紀では皮靴だったのかも知れないが、今は焼け焦げた木靴とよんだほうがよく、上着もズボンも、——ズボンときたら殊にひどい。丸

く突出した膝のあたり、尻あたりの布地は極端にすりきれ、うっかり引っぱったなら即座にばらばらになりそうである。

年齢は——年齢はよくわからない。ただ誰もがこう思うだろう。この男は老人というにはまだほど遠い。といって、これからさき生きていたってべつに何にもなるまい。

まあざっとこうした人物が、おそろしい喧噪と人ごみの中にいたのである。パチパチいう音、ジャラジャラッという音、リーンというベルのひびき、一体何事がおこったと思うだろうが、何のことはないこれがただのパチンコ屋の店内で、それにしてもこの男が片手にポロ切れのかたまりであるカバンを、片手に多くもない玉をしっかりと握り、あちらをうろろ、こちらをうろろろしているのは、見るだけで胸を打たれるような光景といえた。しかし実際は誰ひとり胸なんぞ打たれる者もなかったのは、こんなことはこの世にありふれたことだからである。

その男は、人ごみの中をずんぐりした身体をよじりながら苦勞して通りぬけ、一つのパチンコ台の前に立つと、釘の様子だのバネの調子だのを実に長いことかかって克明に調べあげる。それからさんざためらったり逡巡したりしたのち、ようやくと決心をかためたらしく、ひとつ息を吸いこんでから玉を入れ、まるで放射能物質でもあつかうみたいにおそるおそるバネを弾く。いくらかの期待が、そのむくんだ顔を横ぎるが、それよりずっと大きな諦念がすぐにその上にかぶさってしまう。玉をはじきながらも、彼の心はしょっちゅうこう呟いているのだ。『ダメかな？　どうせダメだろう』『はいるかな？　いや、はいるまい。はいるう筈がない筈だ』

そのとおり、玉はいりはいしなかった。定まりきったことのように、むなしくあちこちの釘にぶつかり、肝腎の穴は素通りした挙句、一番下の穴に消えてしまうのだ。たいていの人ならここでもう腹を立てるところだが、彼は腹の中でこんな具合に弱々しく呟くだけである。『そうだ、思ったとおりだった。やっぱりダメなのだ。なにしろこの俺がやったことだからな』五つ六つしくじってしまったと、彼はもうすっかり絶望してしまい、また別の機械を探すため、残り少い玉を汗ばんだ手にしっかりと握りしめて、人混みの中をあたふたとわけてゆくのだった。人とぶつかる、と、べつに彼のほうがわるいのでなくても、彼は慌てくさって頭をさげた。この世ならぬぶしつけをしてかしたかのように、ぎくしゃくと頭をさげたのである。

なにかの拍子にうまく玉はいって、ジャラジャラッと十箇の玉が受皿にとびだしてくると、さすがに彼の口もとは妙な具合にはころびかける。だが、それは一瞬のことであった。すぐに不安と猜疑がこびりついてきて、むくんだ顔をびくびくとふるわせる。その顔はまるでこう語っているかのようだ。『なるほど今はたしかにはいった。しかしこれが続く筈はあるまい。きつとダメだろうな。そうとも、もうはいりっこないさ』そのとおり、玉は二度とはいらなかった。どんな弾き方をしてみても、口の中でナムアミダブツと呟いてみても、ただの一つもはいりはいしなかった。いったん増えた玉はたちまち少くなって、三つとなり、二つとなり、そして完全になくなってしまった。まるで結果を精密に計算した科学の実験をやっているのと同じなのである。

しばらくの間、彼はたしかに呼吸を停止していたように思われる。もともと色のわるい顔の皮

膚からすっかり血の気が失せてしまい、その代り、相当に大きな先端の平たくなっている鼻だけが充血してきて、その不恰好の鼻の頭にはこまかい汗が粒となつてふきでている。彼は遊び半分にパチンコをやっているのではないのである。言わば全霊をこめ、運命をかけてやっていたので、しかもそれは充分な理由があつてのことなのだ。

なにか人生がそれほどの悪意をこめずに嘲弄しているといったような人間がいるものである。悪意をもつにはあまりに相手が矮小で無力にすぎるからだ。これは第三者から見れば微笑を誘うような関係といつてよいが、当人にしてみれば、これほどみじめで情けないことはない。彼が今度こそはという職にありつくと、わざと仕組んだようにその会社がつぶれてしまう。少しまとまった退職金を得たかと思うと、巧妙な運命の手によって、具体的にいえばインチキな金融会社の手によって、そんなものは元も子も孫までもどこかへとんでいつてしまう。彼の人生はすべてこうした頓挫の連続であり、傍から見ていると、気の毒というより滑稽でさえあった。

一体に彼は自分のほうから失敗と陥没を予期しすぎ、というよりほとんど期待しているようなところがあった。まだ子供の時分から、賭でもするとなると、彼の心には理由もなく極めて決然とした予感が生じてくるのである。“ごりやダメらしいな。もちろんダメだとも。こいつはどうしたつて負けだ”するとそのとおり彼は負けてしまうのである。トランプめくりで勝負をきめるときでも、自分がうまくキングをめくりあて、普通なら十中八九勝つたものとほくそえむところなのだが、彼はどうしてもこんなふうに考へてしまう。“なるほど、おれはキングだ。するとお

れは勝ちそうなわけだが、待てよ、そんなことが本当に起るかな？ 起る理由はなさそうだぞ。奴はエースをひきあてるかも知れん。きつとそうだ。奴はエースなんだ” そうして相手が札をめくってみると、彼の予感はその見事に悲しくも適中してしまうのだ。

彼の人生がどんな具合に送られてきたかを物語るより、彼のやることを為すことがことごとく順調に進まないことを示すには、もっと些細な挿話に目を向けたほうがよいだろう。あるとき彼の会社では廊下の壁際に新しいロッカーを設備したことがある。そいつは全体に綺麗にニスが塗られ、それぞれの戸には各自の名札がはいるようになっており、金具のところはピカピカ光り輝いているという大した代物しろものであった。ところがそれを一目見た瞬間から、彼の心には、にわかには信じがちな疑念がこみあげてきたのである。 ”こいつは素敵なロッカーだ” と彼は考えた。 ”俺のボロボロのコートやカバンをいれるには勿体ないくらいだ。さあ待てよ、気をつけろよ、お前さん。こいつはどうもよからぬことが起るかも知れないぞ”

よからぬことといったとてせいぜい盗難にあうことくらいしか考えられぬが、一体どこの世に彼のコートなど持ってゆく盗賊がいるであろう。しかし彼は、じつと瞑想をこらした末、念には念をいれよというコトワザを思いだし、近所の金物屋へ出かけていって南京錠を買いこむことにした。それまで彼のうけた経験によつて、普通の人間にはとても生じ得ないような災厄が雨アラレと自分には降りかかってくることを十二分に承知していたからである。ついに彼はこれなら満足はいく南京錠を見つけたことができた。それはいかにも頑丈な感じで、その鍵ときたらな

んとも複雑にギザギザがついており、どんな合鍵だってあいそうになく、彼は急速に空腹をおぼえたほど満足であった。値段もどうして安からぬものであったが、彼は念仏をとえつつそれを買ひ求め、鍵のほうはしっかりと財布の中へしまいこんだ。これでこの鍵さえ失くさなければ大丈夫。なんとしても鍵を失くしてはいけないぞ。なにしろこの俺ときたら弁当箱でもなんでも実にやすやすと失くしてしまうのだからな。

ところが、その上等な錠前をロッカーにバチンとかけた瞬間、彼の内心のどこかで待ちに待っていたよからぬことが惹起した。彼はもはやロッカーを開くことができなくなってしまうのだ。いやいや、決して鍵を紛失したわけではない。彼は予備のものを含めた二つの鍵を大事に財布に入れ、それをコートのポケットに入れてロッカーにおしこみ、外から嚴重きわまる南京錠をおろしてしまったのである。これほど腹の立つ事柄はそうざらにあるものではない。しかし彼は立腹するどころか、いくぶん途方にくれた、むしろ自分のひそかな予感の適中に合点するような顔をして、それでもおろおろと南京錠をこじあげようと試みた。が、なにしろ錠前はこのうえなく頑丈であるし、ロッカーの金具も上質であるし、そんなことが可能であろう筈がなかった。

とうとう彼は南京錠と格闘することは諦めたが、そのうちはたと膝を打ち、あたふたと外へ駆けだしていった。つまり、これとおんなじ錠前をもう一つ買ってくれば、鍵だって同じであると考えついたのだ。俺にしてはなかなかアツパレなものだ。よくもまあそこに気づいたものだ。と彼は胸の中で思った。さきほどの金物屋へ駆けつけてみると、なんとも幸運なことに、たった

一つだけ同じ形の南京錠が見つかったので、彼は無我夢中でそれを買ひ求めた。

「まさかこれで開かないということはないだろうな」と、彼はロッカーの前で新しい鍵を握りながら考えた。「たしかにおんなじ錠なのだからな。開かないという道理がなかるうさ。いやいや、安心しすぎるなよ、お前さん。万一ということが往々にしてあるものだて」錠をさしこみ、ぐるりとひねってみると、何事ぞ、錠はあかなかった。こんな筈はないとさらにふるえる手で祈るように鍵をひねってみたが、おどろくまいことか、やはり錠はあかなかった。彼は吐息をついた。髪をかきむしった。一体いかなる魔物が邪魔をしているのであらう。

これはあとになって彼が聞き知ったことだが、すっかり同形の錠前であつても、鍵のほうは少しずつ違つて造られている。まったく同じ錠は錠前「ダース」の中に二つしかないというのだ。それはともかくとして、せっかく買ひ求めてきた鍵も役に立たぬので、彼は今度は「おじ」を借りてきて、ロッカーの金具をなんとかして取外そうと試みた。しかし前に述べたように甚だ立派な金具であつたから、ねじ一つびくともするわけがない。彼はとうとううめき声を發した。うめきながらロッカーを叩いた。一体に彼は諦めはいいほうなのだが、どうかすると稀に逆上する癖があつた。しかしうめいたとて叩いたとて、そんなことでどうにかなるような粗末なロッカーではなかつた。とどのつまりは、ロッカーをおさめた会社が職人を派遣してくれるまで、彼はカバンとコートなしでつまさなければならなかつたし、その間いやというほどみんなの嘲笑を買ねばならなかつた。錠前ひとつのことで、彼に襲いかかる難儀災厄というものはざつとこのとおり

だったのである。

さて、われわれがこのずんぐりした気の毒な人物についていささかの知識を得ている間に、パチンコ屋の中にいる彼のほうはため息をつきながら何度か玉を買い直し、嘘みたいな短時間のうちにそいつをことごとく失ってしまっていた。この日の彼はどうやら諦念に身をまかせすよりも逆上しやすいほうの傾向にあったようだ。無理もない、この年齢になって、彼はまたもや失業保険の厄介にならねばならぬ事態に立ちいたっていたのである。彼とても妻もあれば子供もある。さきほど彼は夕暮のあわただしい街を歩きながら、かつて経験したことのない呼吸が切迫するほどの感慨におそわれたものである。どこをどう歩いたのかわからないほど、混乱して打ちひしがれて、雑踏の中をうろろと歩いた。

そうして、ビルの角に店をだしている占師の前にはほど歩み寄ろうかと思ひ、いやいやもっとみじめになるだけなのだと思ひなおし、次には非常に稀有なことだったが、どうしても酒をちょっとと飲用してみたいという気を起して、行き当りばったりの店にとびこんでみた。壁につるされている木札で値段をたしかめてから、銚子を頼み、湯豆腐と酢の物を頼んだ。値段を計算してから銚子を追加し、もう一度計算をして、更に念のため三たび初めから計算をしなおした。『大丈夫、そう高くはないな』と彼は考え、盃をのみほすと、だしぬけに鼓動が急速になってくるのを覚えた。『待てよ』と彼は思った。『なんだかこれだけの勘定で済みそうもないぞ。きっと法外に高いぞ。いやいや、ここは単なる飲屋で、サービス料をとられるわけではないし、それに俺は注文